
刹那なる永遠 明日に響け

今井遊里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹那なる永遠 明日に響け

【Nコード】

N2448S

【作者名】

今井遊里

【あらすじ】

不可解なことが身の回りでおき始めた少年。絶対に卒業式の日だけはと・・・願っていたが、皮肉にもその日に、世界を超え何処かに飛ばされてしまう。そこで出会う、少年少女達。

曖昧な伝説、待ち受ける障害、清算できぬ過去、残酷な運命。築きあげた絆を胸に、少年達は今、絶対・に挑む。

1・0 変えるべき運命（前書き）

短いです。プロローグ短いです。

えっと、初作品です。まだまだ至らない所が多く、見苦しい所があります。読んで

少しでも面白いと思って頂ければ、自分にとっては幸いな事です。

1 - 0 変えるべき運命

プロローグ

普通の生活。学校に行き、勉強をして友人達と会話をし、家に帰るだけの生活。

その生活がこれほどまでに懐かしく、そして遠く思えるなんて、あの時は思っただけでなかった。

普通の生活、幸せと呼ぶべきか、当たり前というべきか解からない。でも、今の俺はその生活を幸せと呼べるだろう。

残酷すぎる運命という奴に出会えば、俺だけじゃない、誰でも言える。

ただ、それを悟らす為の代償がこれだなんて、あんまりだ。

頭の中で様々な事を思いながら、赤い池に横たわっている友人をそっと起こす。

目は閉じられ、体は冷たかった。周囲からは鼻をすする音が聞こえ始めていた。

しかし、感情に飲まれずやる事を思い出す。復讐だ。

腕に友人を抱いたまま立ち上がり、傍らにいた友人に預ける。

「頼む」

倒れていた友人を託す。

俯いていた顔をゆっくり上げ、正面にいる男に向ける。

目が合うと男は何か喋ろうとしたが、俺の怒声がそれを遮る。

「殺してやる！　　！！」

言い放つと同時に、走り出した。男はそれを楽しみにしていたのか口が裂けんばかりに笑う。

「ははははっ。来い、

！！次はお前だ！！」

1・0 変えるべき運命（後書き）

どうでしたかって？こんな短いプロローグじゃ感想の言いようもありませんね・・・

続きも随時上げていく予定です。

短いプロローグですが、本編は長くしたいなあ〜って思っています。えっと、コメントは厳しい評価も重んじて受けるつもりです。

これからよろしく願います。

1 - 1 帰らぬ問いかけ（前書き）

本編スタートです。

是非、読んでみてください。

1 - 1 帰らぬ問いかけ

はぁ、疲れた。

黒板に並んだ、訳の分からない数式共。俺を苦しめる数学教師。この発言だけを聞いたら、俺をとんでもない馬鹿だと思うが、この教師は、何かしら俺に突っかかってくる、とんでもなく難しい問題を解かそうとする。

「無理です・・・こんなの解かる訳ないじゃないですか！」

今までは、頑張れば解ける問題しか出してこなかったが、今日に限って教科書に載ってもない場所から出してきやがった。だが、無理だといったら、毎回こう言われる。

「おやあゝ？予習しときなさいって言つといた気がするけど・・・」

嘘だ！絶対に言っていない！教科書に乗っていないものを予習していただくさいって言うか普通！？

と言うか教科書に載っていないものをやるか？

「すみません・・・してません」

逆らうと何かと面倒なので、下手に出て終わらせようとする。

「そうかあゝ、やる気がないのかあゝ」

思わず、はい、そうですよと頷きそうになったが、そんな事をしたら、逃がしてもらえないので何とか堪える。

「もういい、席に戻れ」

クラスメイトにクスクス笑われながら、扉側の一番後ろの席に戻った。席に戻ると、笑いを堪えた隣の女子が話しかけてきた。

「ねえ、どうすればあんなに嫌われるの？」

「こっちが聞きたいよ」

この問答の通り、本当に心当たりがないのだ。あいつがいくら特徴的な頭と体系だからって悪口を言った覚えはないし、授業だった真

面目に受けてる。いったい何処に問題がる？

5, 4, 3, 2, 1, 0。救いの鐘が鳴り響く。嬉しい飯の始まりと忌々しい数学の終了の時間。

終了挨拶が終わったら、それぞれの鞆から弁当箱を取り出し、中のいい奴らと食べ始める。

それに、ここは公立の中学にしては珍しく弁当。

「なあ、お前どうすればあんなに、絡まれんだよ？」

先ほどと同じ質問をされ苛立つ。

「知るか」

この質問をされたのは、一度や二度ではない。そう、それほどまでに奴は絡んでくるのだ。

別名禿彦。本名猿彦・・・じゃなかった、明彦だ。

「ほんつと、不思議だよなあ」

質問をした友人が珍獣でも見るかのように、俺に視線を向けてきたので我慢できずに、腹を殴った。

「ゲふ・・・」

こりゃラッキー、鳩尾だけ。

「若くして死にたくなければ、そんな目で俺を見るんじゃないぞ」

「りよ、了解・・・」

腹を抱えてうずくまっている、友人から精一杯の返事。

「よろしい」

いい返事が聞けたので、食事の再開。

嬉しい飯の時間も、友人達と会話をしているとすぐに過ぎてしまふ。そして、会話ばかりにして

全然弁当の中身が減ったに気づき、急いで食べる。
俺にとっては何気ない日常、当たり前であった日々。それが変わり始めたのは、卒業式の一週間前からだった。

「ああ、もうすぐ卒業だぜ」

「うるさい、それ今日何回目だ？」

ただ今五コマ目、この言葉は耳にタコが出来るほど聞いた。さすがに、うんざりだ。

「うーん、わかんねえ」

友人は指を折って数えていたが、諦め机に突っ伏した。

「わかんなくなるくらい、言ってんなら黙れ。二度と喋るな」

「ふっ」

「おっと、返答も結構だぜ」

ひどい様だが、繰り返し聞かされてたら、嫌にもなる。

「だから・・・」

喋ろうとした俺は、周りの異変に気づく。みんなの動きが止まっているのだ。教師も生徒も全員だ。

「おい」

先ほどまで喋っていた友人の目の前で手を振ってみるが、何の反応もない。

隣のクラスの奴らも全員止まっていた。大人しく、自分の席に戻ると、フワッと空気が流れた。

「ふざけんな！」

突然聞こえた声に驚いて、寝かしていた体を起こすと、止まっていた連中がみんな動いていた。

「何驚いてんだよ？」
俺の気も知らないで、いつもの間の抜けた声を出す。
「いや、何でも無い。それより喋るなって言っただろ」
時が止まっていたと言っても、信じないだろうから、起きた事は忘れ話を合わせる。
心に大きな不安を残しながら、授業を終えた。

その日ノ夜

「どうして・・・」
ベランダで、頭を抱え悩んでいると、いい匂いがしてきた。
「飯だぞ」

「ああ、今日はカレーか。いや、今日もカレーか・・・」
こいつが当番の時は絶対にカレー。
悩ましそくに声を上げると、テーブルに置いてあった俺のカレーを取り上げてきた。

「何すんだよ！」
「どうやら。お前は俺が作ったカレーを食べたくないらしいな」
「わかってるなら、もっと別の物作りやがれ！」
急に腹が立ってきたので怒鳴る。怒鳴ると奴は、ほっとして自分の耳を塞いだ。その拍子に、カレーが床に落ちる。

「おい！」
「う、嘘だ！うちの子に、うちの子に反抗期がくるなんて！」
俺は思った、この寸劇は、床を汚してまでやる価値があったのか？と。

それに、俺はこいつの子じゃない。

「てめえ、掃除すんの誰だと思ってんだ」

苛立ちを抑えながら問うと、悪びれた様子も無く、俺を指差してはつきりと言った。

「ん？お前だから落としたんだけど・・・」

その一言で、俺は爆発した。

「潰す！！」

殴りかかる。が見事に避けられてしまう。

「チツチツチ、甘いな、弟よ。そんなんじゃあ、お兄様は捕らえられないぜ」

俺の前に、余裕な顔で立っている兄貴。確かに、こいつにとって初心者のパンチを避けるなど

容易いだろう。なんせ、ボクサーだ。おまけに剣道もやっている。悔しさのあまり、自分の拳を見ていたら、おどけた声で煽られる。

「どうした？まさか・・・終わりか？」

睨みつけると、余裕の顔に怒りが再度湧き上がり、拳を握り殴りかかる。

「はあ、はあ、くそ」

時計を見る。

今の時刻は、深夜十二時。流石に、近所迷惑だと兄と和解して勝負は終わった。

兄は引き分けたと言っていたが、明らかに俺の負けだ。何せ一度も殴れなかったのだから。

翌日の学校でも昨日と同じ事が起こった。

どうしてかは、もちろん知らない。そしてしばらくすると、途端に元通りだ。

それに、気が掛かりな事も出てきた。それは、寿命だ。

時が止まっている間、俺だけが生きているのだ。

皆より早く死んでしまふ・・・そんな考えが頭を過ぎると、みんなはいつの間にか動き出しているのだ。「おい、大丈夫か？」

友人に話し掛けられ、はっと顔を上げる・

「お前、最近どうしたんだ？ずっと上の空だけど。振られたか？」

「違う。今のところ好きな女子もない」

「そうなのか？でも、もうすぐ卒業だぜ。この三年間で、こう、グツとくる出会いはなかったのか？」

自分の胸の前で、拳を握り迫ってくる友人。

「気持ち悪い。近寄るな」

「さびしい奴だな、お前。俺なんか、一組の春子ちゃんに、三組の夏美ちゃんと秋子ちゃんをチョイスしてるとこだぜ」

友人の最低な発言は無視して、考えに戻る。

「はあ、無視かよ。顔はいいんだからさ、もうちょっと欲張ってもいいんじゃない？」

「うるさい！次喋ったら、殴る」

赤面している俺を、見ているのが楽しいのか、周りの連中が笑い始める。

やったぜと言う顔をしている、友人。殴ってやりたかったが、周りを見方に付けられたので、下手な行動は出来ない。

「っち」

舌打ちだけをして、机に目をやると閉じていたノートが、開いており、女みたいな丸い字で書かれていた。

「そろそろ時間だよ」と。

急いで机の前の奴らを確認するが、いたのは男だけ。

もう一度ノートに目を落とすと、書いてあったはずの字が消えてい

た。

「なんなんだ」

誰にも聞こえないように、小さく呟いた。

その後の授業も、不安を残しながらではあったが、友人たちとの会話で何とか楽しくすごせた。

食事も済ませ、風呂にも入った俺は自室で、文字通り、頭を抱えて悩んでいた。

「どうなってるんだよ」

抱えていた頭を上げ、冷たい光を放つ月を窓越しに見上げた。

ジツと見ていたら、目が痛くなってきたので逸らすと、突如視界が、ホワイトアウトした。

うちに閃光弾なんてあったっけ？ 兄貴の新手のイタズラかもしれない。

痛む目を、無理やり開けると、白く何も無い空間に一人立っていた。

いや、もう一人いる。ただその少女は、浮いている。俺よりはるか高みに、ずっと、ずっと高い位置にいる。

その為、顔が認識できない。体の線から、自分の判断で少女になっているが、真実はわからない。

しかし、これだけはわかった。何か言っている。顔が見えなくてもわかるのだ。

「何を言ってるんだ!!!」

あらん限りの力で少女に問い返す。

「頼む、教えてくれ！俺に何が起こってるんだ!!!」

段々と少女が遠のいてく。必死に手を伸ばし、この思いを届けよう

とする。

しかし、届く前に闇に飲まれ現実戻される。

冷たい夜にあわず、以上に汗をかいている俺。

「なんなんだよ・・・」

両手を握るが、先ほどの体験で脱力しており、うまく力が入らない。
難しい事は忘れ、その日は何とか眠りにつけた。

その日から二日、オなしことを繰り返し、残すは卒業式となった。
頼むから卒業式だけは邪魔しないでくれ。そればかり願っていた。
しかし、皮肉にもその日に滅びの運命に放り込まれるなんて、思い
もしなかったよ。

1 - 1 帰らぬ問いかけ（後書き）

えっと、すみません。続きもあげました。
これで、本編の一話は終わりです。
是非、読んでみてください。

出発の時間（前書き）

第二話です。正直、自分の中で二話は一番つまらない・・・
いいえ！でも、一生懸命書いた事に変更ありません！
是非読んでみてください！

そんなどうでもいい、葛藤わたくしをしている私でした。

出発の時間

卒業式の日。

あの忌々しい数学教師から解放されるため、限りなく嬉しい気持ちで、家の扉を開けたら

この前と似た光に包まれる。その光に飲まれる時に聞こえた声
「時間です・・・」

どこか儂げなで辛そうな声。

その声に目を開けると、日の光に燦々と照らされた明るい木々に囲まれた場所の真ん中に立っていた。

また夢かと思っただが、何か違うのだ。

その理由がわからず、手を開いたり閉じたりしていたら、わかった。
空気があるのだ。

別に今までの夢に無かったと言うわけではない。

しかし、この夢は息をしないと苦しくなるし、おかしいようだが足に感覚がある。

地面の場所がわかるのだ。

だったらこれは夢でな現実^{リアル}？

まだまだ、まだ答えを出すには早い。

このままでは、埒が明かないので人を探そうと思いきり叫ぶ。

「誰かいませんかー！」

しばらく待つが、木霊しただけで返事は返ってこなかった。

少し不安になり俯くと、足元に奇妙な石碑があることに気づいた。
かかっていた土を手で払い、音読してみた。

「汝 選ばれた者。 の になりて、宿命を果たさ

ん。さすれば を与えられ、帰路が開かれん」

この石碑は何を言っているのだろうか？ よりもよって肝心な部分
が、かすれていてまったく

読み取れない。

だけど、今の自分にとって一番重要なことは読み取れた。

「帰路が開かれん」

この石碑が俺を指して言っているかは、定かではないが、ここで何かをすれば帰れるかもしれない。

肝心な何かはわからないが。

まるで、植えつけられた感情がそう言っているかのようだった。

そのお陰か落ち着いている自分がいる。

それが、慣れてしまったからかな。

そんな自分に苦笑し「絶対に帰ってやる」と決意して歩を進めた。

ここに来て既に、1、2時間。時計を持っていないので、あっているかはわからない。

道なき道を歩けど歩けど、見えてくるのは草木ばかり、一人見当たらない。

よくよく思うが俺はここに来るまでに、物凄い体験をしてきた。

今まで、魔術のなどのオカルトは興味も無く、信じてもいなかった。別に今も信じたわけではないが。

だが、自分の置かれた状況を思うと否定も出来ない。

しかし、何も見えてこないな。

もしかして、現代じゃない？タイムスリットとかそっち系？

いや、ありえない。絶対にありえないと否定しながらも不安に駆られ、焦り始める。

こんな所で死ねない。その気持ちだけが、疲れた体を動かしていた。

しばらく歩いてみると、左側の森から音がした。気が折れる音だ。人が切っているのだろうと思ひ安心した。これで助かると。

急いで向かおうとしたら、獣の咆哮が聞こえた。その咆哮が止むと同時に走る音が聞こえる。

しかも、木をなぎ倒しながらこっちに向かって来るのだ。

これは明らかに人が出来るようなことではない。急いで逃げよう時には遅かった。

視界に映ったのは、体長3メートルはありそうな化け物だった。

ライオンがでかくなったような感じだが、ライオンとは比べ物にならないくらいでかい。

目の前に立っているのは本当に地球の生物なのか？いや、そんな事はどうでもいい。

とにかく逃げなければと、足が恐怖に竦んで動かない。

化け物の方は、獲物を仕留めようと、鋭い爪の付いた、前足を振り上げ俺を切り裂こうとした。

驚き、とっさに伏せてかわしたが、後ろにあった木が真っ二つに砕けていた。

危なかった、下手^{へた}すれば俺が木のようになっていた。

それを思うと、恐怖に飲まれそうになる。

呆然と木を見ていた俺だが、頬に嫌な感覚が走る。その痛みで現実に戻ると

必死に立ち上がり化け物と対峙する。

休憩時間はくれないらしく、今度は確実に仕留めようと飛び掛ってきた。

情けないとは思うが、とても大きな悲鳴を上げてしまった。

「うわああああ！！！」

思い切り叫ぶと、恐怖で竦みあがっていた体が動き始めた。

すぐに身を翻して、来た道を全力で走った。

そこで、不思議な事に気づいた。体が軽い、それに足が速くなっている。

それに、あいつは体がでかいからいちいち木を倒さなくちゃならない。

そのお陰で、一時的に差は開いたが、化け物のと距離は徐々に、そして確実に縮まっていた。

まずい、このままでは食い殺されると焦り、後ろばかりに気を取られていたが、森が開けている事に

気が付いた。

その開けている所に向かって走ると、相手も逃がすまいと、右足に何かを掠ったかが、無事開けている場所に着地できた。

諦めてくれると思いきや、よほど腹が減っているのか、まだ臨戦態勢。

今にも飛び掛ってきてきそうだ。

左右を見る。恐らくはどっちかが街に続いている道だ。

どっちだ、早く決めなければ喰われる。

右か、左かどっちだ？迷っていると化け物が全身に力を籠め、飛び掛ってきた。

迷いを断ち切り右に走ろうと、足に力を入れる。それと同時に足に鋭い痛みが走る。

さっき引つ搔かれて出来た傷か。掠っただけだと思っていたが、結構深い傷らしい。

一瞬痛みに顔を歪めたが、死ぬときくらい、かっこいい方がいいと、本当にどうでもいい事を思い、

奴を睨みつける。

化け物の口がゆっくりと近づいてくる。

これで、終わりなのかと目を閉じる。

聞こえてくるのは化け物の唸り声だけ、そう思ったが遠くの方から声が聞こえてきた。

「フレイムバレット!!」

空を裂く。当たったのか肉が焼ける匂いがする。

その瞬間までかっこいい唸り声を上げていた化け物が、犬が蹴飛ばされたようなような声を出した。

恐る恐る、目を開けると、目の前にいたはずの化け物が吹っ飛ばされていった。

横から、走ってくる音が聞こえてくる。その方向を見ると、俺のすぐそばを髪の毛の長い青年が通り抜けた。

剣を抜く鋭い音がすると青年が叫んだ。

「火翔刃ひしょうじん!!」

おいおい、マジですか?この人正気?と命の恩人を馬鹿にしていると、本当に赤みを帯びた剣閃が飛び出していった。

その剣閃は化け物に当たると爆発し、化け物が苦しそうに声を上げる。それが合図になったのもう一人の少年も勢い良く走り出した。

その少年も、技名らしきものを叫んだ。

「終わりだ!雷影剣!」

その少年の持っている二本の剣に青い電狐が走ると、目にも留まらぬ速さで振りぬいた。

その一撃にドスンと化け物が倒れると、こっちに来た。

「大丈夫かい?」

若々しい声だった。同い年くらいだと思いき敬語は使わなかった。

「ああ、平気だ」

平気と言う所を見せようと立ち上がるつもりだったが痛みで足が動かない。

その時、後ろから声をかけられた。

「本当に大丈夫なの?」

首だけで振り向くと、立っていたのは十代半ばの女の子だった。

「ああ、大丈夫だ」

さっきと似たような返事を返すと、いたずらっぽい眼になって

「じゃあ、立ってみて?」

痛いところを突かれた。足の傷を見られたのだろつ。

もう、誤魔化せないと思つたが、見ず知らずの人に頼るのは嫌だつたので、まだ誤魔化す。

「いや、びつくりして腰が抜けちゃっただけだからさ、全然問題なし」

「はあ、まだ誤魔化すの？」

呆れさせてしまったらしい。クスツとその子は笑つと。

「足出して」

「え？」

恐ろしい事を言われた。足を出せと・・・女のこの腰には剣が・・・女の子はそれに手を当て引き抜いて言つた。

「手遅れだから切断します」ニコツ。ど、どうして周りの男は止めないんだよ！恐怖に飲まれ思わず叫んでしまった。

「やめてくれ！切らないでくれ！」

「切らないよ。何言ってるの？」

驚いた声で帰ってきた。

驚きの顔がしばらく続くが、必死に状況を飲みこくと、女の子を見る。腰に剣はあるものの抜いてはいなかった。

俺の妄想！？周りに微妙な空気が流れる。

何とか取り繕う。

「い、いや、違つんだ。そ、そつだ、足だっけ？ほらちよつと切つただけだから、大丈夫だぜ」

焦りながら誤魔化す。

「あなた、これがちよつと・・・なの？」

女の子の綺麗な顔が少し歪んでいた。

そんなにひどいのか？気になって自分で見てみると、大量の血が出ていた。

傷を気にしていなかったお陰か痛みをほとんど感じていなかったのだが、傷口をみたら、感じていなかった痛みが一気に来た。

「つつう・・・」

痛みで声を漏らしてしまう。すると女の子はやっぱりと言う顔をする。

おまけに、今まで黙っていた青年に、言われてしまった。

「見た目と同じで、馬鹿だな」

冷たく言い放たれたので、言い返そうとしたら女の子が先に口を開く。

「初対面の人に失礼でしょ、ヴァン」

女の子がフォローしてくれるが、ヴァンと呼ばれた青年が、さらに言い返す。

「どうせ二度と会うまい。それに馬鹿なのは事実だろう」

無表情なのが余計にムカついたが、女の子が言い返そうとして、俺は止めた。

喧嘩になつたらいやだから。

「いいって、言い返さなくても。それより、手当てしてくれないかな？今持ち合わせがないけど・・・」

語尾を濁すと、急に笑って

「お金？いらないよ。それにごめんね。先に癒すべきだったね」

癒す？何を言っているか理解しようとしてると、女の子が手を傷口の近くまで持っていくと、

何かを静かに唱えて言った。

「ヒール」

女の子の手からキラキラと光が出て傷口を包んだ。

「はい、これで大丈夫だよ」

足を見てみると傷が綺麗に塞がっていた。

呆気にと取られていたが御礼をしなければと頭を切り替える。

「あ、ありがとう」

お礼を言った後、自分の傷があった所を見る。すげーと感心していたが、どうやったのか気になり、聞いてみようともう一度三人の方を見る。するとその後ろで何かが動いている。

じーっと見て、それが何かわかった時、俺は息を飲んだ。
嘘だろ、さっき殺された化け物が動いている。

一番ムカつく奴が俺の異変の気づき、後ろを振り返る。

その瞬間に飛び掛ってきた。

とっさに両手を広げ三人を倒す。

化け物が倒れた上を通り抜け、さっきまで俺が居た場所に着地する。
振り向いたその顔を見ると、吐き気が襲ってきた。

どうしてだ、どうして顔が切り裂かれているのに動ける。

三人を見ると、こう言った経験はないのだろう、表情が驚愕に満ちている。もちろん俺もない。

化け物は短い方向を上げると突進してきた。

どうして俺が動いているのだろうか？と自分自身に疑問を持ちながら、
女の子の持っていた剣を引き抜く。

「借りるぞ！」

そう言っただけで突進してくる化け物に向かっていく。

「止めろ！死ぬぞ！」

ヴァンの警告を無視してそのまま迎え撃つ。

「はああああ！！」「ごがああああ！！」

向かってきた化け物に剣を振り下ろした。

突き刺さったものの勢いを殺しきれず、跳ね飛ばされ運悪く、木に
頭を打ち付けてしまった。

だんだんと意識が遠のく、薄れゆく景色の中、ヴァンが化け物と戦
う姿が最後に見た映像だった。

出発の時間（後書き）

はい！二話終了です！

読みにくいと感じるかたもいらっしやるかもしれません。

すみません。

いつか直します、三話も直ぐにでもあげて行きたいと思えます。
読んでみてください。読んでくださった方はありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2448s/>

刹那る永遠 明日に響け

2011年10月8日22時53分発行